

ルーマニア（2023年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [在ルーマニア日本国大使館](#)

1. 2021年度日本語教育機関調査結果
2. 日本語教育の実施状況
3. 教育制度と外国語教育
4. 学習環境
5. 教師
6. 教師会
7. 日本語教師派遣情報
8. シラバス・ガイドライン
9. 評価・試験
10. 日本語教育略史

1.2021年度日本語教育機関調査結果

機関数	教師数	学習者数								
		合計	初等教育		中等教育		高等教育		その他教育機関	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
12	40	1,892	39	2.1%	651	34.4%	522	27.6%	680	35.9%

（注）2021年度日本語教育機関調査は、2021年9月～2022年6月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

1970年代にブカレスト人民大学に市民対象の日本語講座が開設され、1978年より、ブカレスト大学外国語学部にJFから日本語教育専門家が派遣されるようになった。1989年の「革命」までは、この2校以外での日本語教育はほとんど行われていなかった。

「革命」以降は、ブカレストの私立大学3校（スピルハレット、ヒペリオン、ディミトリエ・カンテミル）、クルージュの国立バベシュ・ボヤイ大学、中等教育機関である国立イオン・クレアンガ高校で日本語教育が始まった。また、日ル交流団体（ブラショフ武蔵野センター、トゥルグ・ムレシュ「至道」協会）、児童の課外活動を実施する「子ども宮殿」（ヤシ、シビウ、トゥルグ・ジウ）など、学校教育以外での日本語教育も盛んになった。

これらの機関のいくつかには、1997年より JICA 海外協力隊の日本語教師が派遣された。2000年初頭には、JICA 海外協力隊による日本語教師会が発足、2005年11月にはルーマニア人教師が加わりルーマニア日本語教師会が正式に立ち上がり、2007年11月には同教師会は法人化した。同教師会の主な活動は、日本語プレゼンテーションコンテスト（2017年に日本語弁論大会より移行）及び勉強会の開催・運営、日本語能力試験の実施・運営、近隣諸国での研修会参加などであり、JF 派遣の日本語専門家との協力により日本語教師の研修、レベルアップに努めている。しかし、2007年のルーマニアの EU 加盟により、2009年1月に JICA 海外協力隊が完全撤退したため、日本人教師は激減し、現在はルーマニア人教師を中心として教師会が運営されている。

2005年度よりボローニャ・プロセスによる変更で、学士課程が4年から3年になった。

ブカレスト大学では2006年にルーマニア初の日本研究が可能な修士課程が設置され、また、2010年には日本研究センターが設立された。現在、学部3年、修士2年の連続性のあるカリキュラムが模索されている。また2013年度から2014年度にかけて学部カリキュラムの大幅な改定を行った。新カリキュラムはヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）・JF 日本語教育スタンダードを取り入れている。

クルージュのバベシュ・ボヤイ大学では2008年に日本語セクションが主専攻となり、これで日本語を主専攻とする国立大学はブカレスト大学と合わせて2校となった。

JICA 海外協力隊が撤退したヤシの子ども宮殿では、ボランティアグループが中心となり非営利協会「ひまわり」を設立、日本語学習の場を維持するとともに、ヤシにおける日本文化の普及にも尽力している。その他、クルージュの日本文化芸術センターのような、日本・ルーマニア両国に関わる人々の間で日本関連の民間組織が作られており、日本語や日本文化に触れることができる機関が増えてきている。

2009年2月より、外務省による「日本文化発信プログラム」が始動し、6名のボランティアが派遣された。JICA 海外協力隊撤退後、母語話者教師の不在が大きな問題とされていたが、このプログラムによって再び母語話者教師がルーマニア各地に配置された。しかし、2011年2月、同プログラムが第一期で終了となり、ボランティアは全員帰国した。そのフォローアップとして、外務省の「草の根日本発信プログラム」により2名が、2011年10月より約3か月、ブカレストの高校と地方の大学2か所（兼任）に派遣され、日本語教育を実施した。その後は同様のプログラムはなくなり、母語話者教師の不在により、多くの講座・機関で閉講を余儀なくされている。

ルーマニアの各大学と日本の大学との交流協定（連携大学のインターンシップ制度など）が増加している。また、バベシュ・ボヤイ大学では、2017年に日本研究センターが設立された。

ルーマニア日本語教師会は、在ルーマニア日本国大使館と共催で20年にわたり日本語弁論大会を開催してきたが、2017年より日本語プレゼンテーションコンテストに移行した。また、2020年から、これまで開催していた日本語教育・日本語学シンポジウムを勉強会へと形を変えて教師研修を行っている。

背景

1989年「革命」以降、日本に関する情報や物品が多く流入したことに伴い、国民の間に潜在的にあった日本への関心が大きくなった。また、二国間の文化交流を促進する友好団体の活動、日本・ルーマニア友好都市間（例：ブラショフ市と武蔵野市）交流などを通じ、草の根レベルでの二国間交流が発展したことも、日本語学習者増加の要因となっている。

特徴

学習者規模は年々大きくなっており、2015年には約2,000名（JF 調査 2015年度日本語教育機関調査）を越えたが、2021年度と同調査では1,900名弱と減少に転じている。これまでは高等教育で学習を始める者が多か

ったが、初等・中等教育や学校教育以外での学習者が増え、学習者層が厚くなりつつある。日本のアニメやマンガ、J-POP、ゲーム、コスプレへの興味などが、日本語に関心を持つきっかけとなる例が多い。

最新動向

過去に JICA 海外協力隊や日本文化発信プログラムの派遣があったティミショアラ西大学では、2020 年 2 月から課外講座としての日本語クラスが再開されていたが、2023 年 10 月から文・歴史・神学部内に副専攻として日本語講座が開設された。また、ティミショアラ工科大学でも 2023 年 11 月から課外講座としての日本語クラスが開講された。

教育段階別の状況

初等教育

異文化理解及び欧州域外の文化と接する機会の提供を目的に、2017 年現在、ブカレスト市内の小学校 1 校で、課外活動として、日本語・日本文化が教えられている。2017 年には同校で、ブカレスト大学との交流活動として、同大学の日本語専攻の学生たちが中心となって小学生たちに日本語・日本文化を教えるというプログラムも実施された。また同じくブカレスト市内のアフタースクール（私営の学童保育のような機関）1 校で、日本語の授業が開かれている。特に初等教育レベルの子どもたちの日本語・日本への関心が高まっており、今後もさらなる広がりが予想される。上述の小学校と私立の学童で教えている教師が 2019 年度 JF の海外日本語教師研修に参加した。

中等教育

首都ブカレストにあるイオン・クレアンガ高校では日本語教育に力を注いでおり、日本語インテンシブクラスを設置の上、週 30 時間以上の日本語授業を実施している。同校の教員 2 名は、2016 年度 JF の海外日本語教師研修に参加した。

ブカレストとトゥルゴヴィシユテの中学校ではそれぞれ課外活動として日本語が教えられている。

高等教育

ルーマニアの大学では、日本語はダブルメジャーの一つとして専攻できる。国立大学では、ブカレスト大学（日本語は主専攻のみ）、バベシュ・ボヤイ大学（主専攻、副専攻のどちらも可）の 2 校で、私立大学ではディミトリ・カンテミル大学、ヒペリオン大学の 2 校が日本語専攻を持つ。それ以外に、日本語が選択科目として単位が取得できる大学が 3 校（ブカレスト経済大学、ルーマニア・アメリカ大学、ティミショアラ西大学）あるほか、ルーマニア・アメリカ大学では大学所属の学生だけでなく、一般を対象とした講座も実施している。また 2021 年 10 月からブカレスト工科大学、2023 年 11 月からティミショアラ工科大学にて課外講座としての日本語クラスが開講されている。

文部科学省奨学金のほか、大学間の交換留学制度（ブカレスト大学と奈良教育大学、お茶の水女子大学など数校、ヒペリオン大学と弘前大学、ディミトリ・カンテミル大学と大阪国際大学など、バベシュ・ボヤイ大学と神戸大学）などがある。

学校教育以外

社会人や子どもを対象にした市民講座及び課外活動が国内各地に存在している。ブラショフ市は、日本語や日本文化を学べる「武蔵野センター」を姉妹都市である東京都武蔵野市と共同運営しており、武蔵野市から派遣された日本人教師が常駐し活発に活動が行われていた（2022年にて閉講）。また、ヤシの「ひまわり」や、コンスタンツァの「さくらんぼ協会」でもボランティア中心の日本語講座が開かれている。

ブカレスト市内には「さくら日本語学校」「日本語センターあきの」「紫センター」などの日本語教育機関がある。

また、教育機関に属さず家庭教師などの個人教授を受けて日本語を学ぶ学習者や、インターネットなどを利用した独習者の数も増えてきている。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

9-4-3制。

義務教育は、初等教育（小・中学校）9年間、中等教育（高等学校、高等専門学校）の前半2年間の計11年間。

大学は2005年度からボローニャ・プロセスにより学部が4年から3年になった。

教育行政

初等、中等、高等教育機関は教育・研究・青年省の管轄下にある。

言語事情

公用語はルーマニア語。

トランシルバニア地方のハンガリー人コミュニティでは、ハンガリー語が話されている。

外国語教育

第一外国語開始時期は小学校1年生。

第一、第二外国語として教えられる言語は主に英語、フランス語であるが、その他ドイツ語、イタリア語、スペイン語、日本語を教える機関もある。また、初等・中等教育で少数言語（ハンガリー語、ドイツ語、ウクライナ語、セルビア語、チェコ語、クロアチア語、トルコ語など）による教育を行う機関もある。

外国語の中での日本語の人気

英語や欧州言語とは違い、日本語は実用的な言語というよりは、ポップカルチャー（特にアニメやマンガ）や伝統文化を学ぶ「異文化理解」の一部として捉えられている。

大学入試での日本語の扱い

大学の入学資格検定に必要なバカロレア（高校卒業試験）では、1999 年度から日本語を選択することができるようになった。

4. 学習環境

教材

初等教育

初等教育機関では、絵カードや日本の幼児向け教材などを使用しているようであるが、現在初等教育機関の学習者にふさわしい教材を模索中である。

中等教育

中等教育機関では、『みんなの日本語』スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク）や『げんき』坂野永理ほか（The Japan Times）などが使われている。イオン・クレーンが高校では『まるごと 日本のことばと文化』JF（三修社）の導入を検討している。

高等教育

日本で出版されたものを教科書にしている場合が多い。よく使われているものとしては『みんなの日本語』（前出）、『げんき』（前出）、『BASIC KANJI BOOK』加納千恵子ほか（凡人社）などがある。

教材開発については、これまで作成した自作教材をまとめてテキスト化した『Nihongo o benkyō shiyō! Manual de limba japoneză pentru anul I』が 2010 年秋にブカレスト大学から出版された。

また 2016 年には、ブカレスト大学から、派遣専門家と指導助手の協力を得て、ルクサンドラ・ライアヌ・黒田朋斎共著『意味と機能からわかる日本語文型解説 I』、『同 II』、ルクサンドラ・ライアヌ・千々岩宏晃共著『初中級場面別語彙集かけはし』、『中級場面別語彙集きざはし』、ルクサンドラ・ライアヌ著『日本語上級文型解説』、が出版されている。

学校教育以外

『にほんごかんたん』坂起世ほか（研究社）、『みんなの日本語』（前出）など。その他、ルーマニアで作成された教材としてアンジェラ・ホンドル著『日本語入門』、『日本語会話』、ラルカ・ニコラエ著『常用漢字』がある。

2013 年と 2014 年に出版された『まるごと 日本のことばと文化』（前出）についても、日本語専門家による CEFR・JF 日本語教育スタンダード研修や国内各都市でのワークショップ開催などにより、現地教師の理解も深まってきているので、今後使用する学習者・機関が増えていくことが期待される。

IT・視聴覚機材

特になし。

5. 教師

資格要件

初等教育

日本語教師としての資格要件は特に定められておらず、日本語学習経験のある現地人教師が教えている場合がほとんどである。

中等教育

日本語教師としての資格要件は特に定められていないが、実際には日本語専攻の修士号以上の取得者。ただし、初等教育でも中等教育でも専任教員となるためには、国家試験に合格する必要がある。

高等教育

博士号取得者、または博士課程在籍者が最低条件。

学校教育以外

日本語教師としての資格要件は特に定められていない。学位保持にかかわらず、日本語学習経験や日本滞在経験がある現地人が教えている場合がほとんどである。

日本語教師養成機関（プログラム）

日本語教師養成を行っている機関、プログラムはない。

日本語のネイティブ教師（日本人教師）の雇用状況とその役割

国立の教育機関ではEUの市民権を持たない日本人教師の専任としての雇用は非常に難しいが、私立の教育機関では日本人教師を雇用する場合もある。また、JFの給与助成を受けている機関もある。いずれにしても、労働ビザ取得やその他の手続きが煩雑で時間がかかり、また教育機関の資金不足もあり、日本人教師の雇用は難しい状況である。

教師研修

- ルーマニア日本語教師会主催 日本語学・日本語教育シンポジウム（2019年まで） 2020年からは年2回ほど勉強会を開催
- ブカレスト大学主催 日本語教育勉強会（直近の開催は2023年12月）
- ブカレスト大学主催（JF助成）日本語教育シンポジウム（直近の開催は2022年3月）

現職教師研修プログラム（一覧）

（国内）

上記の勉強会やシンポジウム

（海外）

- JF ブダペスト日本文化センター主催の中東欧日本語教育研修会への被招へい参加
- JF 主催の海外日本語教師研修など

6.教師会

日本語教育関係のネットワークの状況

2005年11月、正式にルーマニア日本語教師会が発足し、2024年現在約25名が会員となっている。教師会の活動としては勉強会の開催（2019年まではシンポジウムの開催）、日本語プレゼンテーションコンテスト、メーリングリストによる各種情報の共有などを行っている。2010年から日本語能力試験の実施機関となっている。

[教師会・学会一覧へ](#)

最新動向

なし

7.日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

日本語専門家

ブカレスト大学 1名

その他からの派遣

(情報なし)

8.シラバス・ガイドライン

統一シラバス、ガイドライン、カリキュラムは確認されていない。

9.評価・試験

毎年1回（12月）、ルーマニア日本語教師会が実施機関となり、ブカレストにて日本語能力試験が実施されている。

10.日本語教育略史

1970年代

ブカレスト人民大学にて市民対象の日本語講座開設

1978年

ブカレスト大学外国語学部にJFより日本語教育専門家派遣開始

1997年

JICA海外協力隊の日本語教師派遣開始

	イオン・クレアング高校にて日本語教育開始
1998年	私立スピルハレット大学（日本語は閉講）、国立バベシュ・ボヤイ大学にて日本語教育開始
1999年	ヒペリオン大学にて日本語教育開始 バカロレアで日本語が選択できるようになる
2000年	日本語教師会発足、ディミトリエ・カンテミル大学にて日本語教育開始
2004年	第1回日本語能力試験がブカレストにて実施
2005年	ルーマニア日本語教師会発足
2007年	ルーマニア日本語教師会法人化
2008年	バベシュ・ボヤイ大学の日本語セクションが主専攻化 アレキサンドル・イオンクーザ大学で選択科目としての日本語クラス開講（現在は開講されていない）
2009年2月	外務省による「日本文化発信プログラム」が始動。6名のボランティアが派遣される
2011年	「日本文化発信プログラム」終了
2018年9月	JFの指導助手派遣終了
2021年10月	ブカレスト工科大学にて日本語教育開始
2023年10月	ティミショアラ西大学にて日本語教育開始
2023年11月	ティミショアラ工科大学にて日本語教育開始